

## 博士論文要旨

氏名	馬 文先
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第 24 号
学位授与年月日	令和 8 年 3 月 17 日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第 5 条 1 項の規定による
学位論文題目	コーパスに基づく「～てしまう」の使用実態と意味・機能への考察 —日本語学と日本語教育に分けて—

## 論文の要旨

本研究は、日本語の補助動詞「～てしまう」を対象とし、その使用実態と意味・機能の分布を資料に基づいて整理するとともに、日本語教育における指導への応用可能性を検討することを目的とする。「～てしまう」は出来事の完了・到達を基盤とする形式であるが、実際の運用においては話し手の評価や感情、出来事成立の仕方などと結びつき、文脈に応じて多様な解釈が生じる。このため先行研究においても、アスペクト論、モダリティ論、語用論など様々な観点から議論が積み重ねられてきたが、用語や区分方法は研究ごとに異なり、使用実態を大規模資料によって横断的に示した研究は必ずしも多くない。本研究ではこの点に着目し、語彙的要因および形式的要因と意味・機能との関係を、コーパスに基づく定量的・実証的記述として整理したうえで、その整理を教育的検討における参照枠として用い、基礎的知見と応用的検討を連動させる形で論を進める。

本論文は二部構成をとる。第 I 部では、母語話者資料に基づいて「～てしまう」の使用実態を整理し、第 II 部で学習者使用および教材提示を検討するための分析枠を整備した。まず先行研究を概観し、各研究で中心的に扱われてきた記述を整理することで、完了、予想外、評価、非意図性などの観点が繰り返し論点化されてきたことを確認した。そのうえで、母語話者資料・学習者資料・教材資料を同一基準で扱うための枠組みとして、「～てしまう」の意味・機能を【A 単純な完了】【B 意図的達成】【C 否定的評価】【D 非意図的達成】【E 非否定的評価】の 5 類型に整理し、用例を一定の手順で判定する方法を提示した。さらに、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）から抽出した約 2000 例を対象に分析を行い、意味機能ごとの出現頻度に加えて、前接動詞の語彙的多様性、意味機能と語彙の結合の強さ、および意味機能間の分布の偏りといった観点から、使用実態を多面的に捉えた。その結果、特定の動詞が特定の意味・機能と結びつきやすい領域がある一方で、文脈条件によって解釈が広く変動しやすい領域も確認され、語彙的環境が意味解釈の収束傾向に関与する様相が分布として明らかになった。

さらに、各用例に現れる「～てしまう」の形式にも注目し、「てしまった」「てしまっている」「てしまえば」「てしまいそうだ」などの形式ごとに意味機能との対応関係を検討した。その結果、同じ意味分類に属する用例であっても選択される形式に一定の偏りが見られ、また同一形式が特定の意味機能と結びつきやすい傾向も確認された。これにより、「～てしまう」の解釈は語彙的条件だけでなく形式選択とも関連しながら運用されていること

が示された。加えて、縮約形「～ちゃう」についても、コーパス資料に基づいて使用例を収集し、出現傾向と機能分布を定量的に検討した結果、広告や日常的な文脈では、完了を表しつつも表現を軽快にし、評価的含意を和らげる方向で機能している例が観察された。ただし、この形式を教育の中でどのように扱うべきかについては、本研究では結論を示すには至らず、今後の検討課題として残される。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で整備した分析枠と母語話者側の分布傾向を参照しながら、日本語教育の観点から学習者の使用実態と教材記述を検討した。分析対象として、中国語母語話者を中心とする学習者コーパス I-JAS を用い、ストーリーライティングおよび描写課題における産出を調査した結果、学習者は母語話者に比べて【C否定的評価】への偏りが顕著である一方、【B意図的達成】【E非否定的評価】等の使用は限定的であり、使用傾向に偏りが存在することが確認された。また、学習者は頻出する定型的な語彙・構文に依存する傾向があり、複雑な文脈や語彙条件では「～てしまう」の使用が回避される場合も見られた。さらに、中国で使用されている教科書を対象に記述内容を分析したところ、教材における提示の範囲や例文の偏りが学習者の使用傾向と一定程度対応していることが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、本研究では、意味機能の出現傾向と語彙・形式の関係を考慮した段階的な指導方略を提案し、初級段階から上級段階にかけて提示内容を拡張していく枠組みを示した。

本研究の成果は、「～てしまう」の使用実態を、前接動詞（語彙）と活用形（形式）の分布から捉え、意味・機能が生じやすい語彙・形式・文脈条件をコーパスに基づいて実証的に示した点にある。加えて、縮約形「～ちゃう」についても同様に資料に基づいて検討し、「～てしまう」との使用・共起傾向の差から、形式差が解釈の方向づけに関与し得ることを示した。さらに、これらの整理を参照枠として学習者産出と教材提示を同一観点で照合し、使用の偏り・回避と提示環境の偏りの対応可能性を具体的に記述するとともに、段階的な導入順序と提示方略の方向性を提案した。

今後の課題としては、他母語話者との比較や話し言葉資料の導入により、得られた傾向の一般性とレジスター差を検証することが挙げられる。また、提案した指導方略について、授業実践に基づく介入研究・効果測定を行い、理解と産出のどの側面に有効かを明らかにする必要がある。併せて、分類基準・分析単位の精密化を進め、語彙・形式・文脈の相互作用をより広い運用場面に即して捉え直すことが求められる。

## 博士学位請求論文審査結果の要旨

2026年2月3日14時から、主任審査委員の建石の司会のもと、本論文の公開発表会を50分間実施した。その後、約10分間の休憩を挟み、15時から審査委員による口頭試問を、最初の1時間は公開、その後は非公開で行い、17時20分に終了した。終了後、審査委員のみにて会議を行い、評価案を決定した。

馬文先氏による博士学位請求論文「コーパスに基づく「～てしまう」の使用実態と意味・機能への考察—日本語学と日本語教育に分けて—」は日本語の補助動詞「～てしまう」を対象とし、その使用実態と意味・機能の分布を実証的資料に基づいて整理するとともに、

日本語教育における指導への応用可能性を検討することを目的としている。「～てしまう」という一形式に焦点を当て、その意味・機能に関する多角的な分析を行っており、意欲的な研究と位置づけられる。特に、200 ページを超える分量にわたり、詳細かつ体系的な分析を展開している点は高く評価できる。また、第Ⅰ部では日本語学の観点から基礎的整理を行い、第Ⅱ部では日本語教育の観点から応用的検討を加えるという2部構成を採用していること、および大規模コーパスに基づく実証分析や教科書分析を取り入れている点も、本研究の堅実さと独自性を示すものである。

ただし、いくつか検討すべき課題も認められる。まず、分析の軸として提示された【A単純な完了】【B意図的達成】【C否定的評価】【D非意図的達成】【E非否定的評価】という5つの分類について、どの部分が先行研究の整理に基づくものであり、どの部分が本論文独自の提案であるのかが必ずしも明確ではない。また、各観点相互の関係性についての整理も十分とは言えず、分類体系全体の位置づけがやや不透明である。さらに、「評価性」と「意図性」という2つの観点で意味分類が可能であるなら、本論文が採用する判断ステップの必然性についてはより明確な説明が求められる。

その他にも、活用形に関する分析においては、各活用形の定義の妥当性や区分の基準について検討の余地があり、その分析の意義や提示方法についても一層の工夫が望まれる。また、第3章の表2から表7に見られる助動詞の扱いについては、記述の整理と修正が必要であるとの意見、第9章での指導への提案においては、「～てしまう」の全ての用法を指導する必要があるのかといった意見が示された。

以上のように、分類基準の明確化や議論の進め方といった点で改善の余地は残されているものの、「～てしまう」という一形式を対象に、多様な観点からここまで包括的に分析した研究は意義深い。特に、第Ⅱ部における日本語教育への応用的考察には説得力のある提案が多く、具体的なデータに裏付けられた議論は今後の教育実践への貢献が期待される。上記の点を総合的に判断し、本論文は改善の余地を残しつつも、当該分野に対して一定の学術的貢献をなすものであるという評価で審査委員3名の意見は一致した。以上のことから、審査委員一同は、本学位請求論文を本学の博士（文学）学位論文としての条件を満たしているものとし、合格と判定する。

2026年2月20日

主査 文学研究科教授

建石 始

副査 文学研究科准教授

朴 秀娟

副査 静宜大学副教授

古賀 悠太郎